

発明文化論

〈第 100 回〉

丸山 亮

香 取 神 宮

先年、春日大社を訪れた際、ここには鹿島神宮や香取神宮も祀られていることを知った。建国神話にゆかりのある武神を祭神とする二社が、平城京鎮護のために合祀されたのであろう。

先ごろ千葉県立美術館で「香取神宮一神にささげた美」と題した特別展が開かれたので、この神宮への興味から足を運んだ。関東を代表する香取神宮は東国の守護神として広く信仰を集めており、末社の数は全国で420に及ぶという。地域の共同体が祀る氏神信仰に発した神道は、やがて力のある神を勧請するようになり、末社が増えていった。八幡は8千、伊勢は4千近くの末社を数えるといい、香取はそれほどでもないが、やはり驚くほどの数がある。香取神宮は農業、商工業、海上守護、心願成就、縁結びや安産の神として信仰されてきたうえに、近年は勝運、交通安全、災難除けとしても、多くの信者が参詣している。

会場に入ると、まず折本の「日本書紀」巻第2が目を引きいた。ここには斎主（いはひぬし）の神が東国のかとりの地に在すとあり、香取神宮の起源が説かれていて、建国神話とのつながりがうかがえる。

展示物では、4月の神幸祭の様を描いたいくつもの絵巻が、祭りのにぎわいを伝えていて見応えがあった。中世から近世にかけて描かれたもので、氏子が供奉する神輿を中心に盛大な行列を繰り広げるさまが、色彩豊かに表現されている。午歳にあたる12年ごとの式年神幸祭は今日でも盛大に祝われ、その記録ビデオが会場で映写されているのを見た。神輿が御座船に乗り利根川を遡る船上祭が珍しい。海上守護の意味を持つのだろう。

国宝の海獣葡萄鏡も、展示の目玉だった。中国隋時代の作といい、日本三明鏡の一つに数えられている。こうした宝物が香取にあるということは、鏡の霊力を取り込んだ神宮の重みを示す。

ところでこの宗教的な権威が世俗の支配勢力に利用されてきた歴史も、展示の文書から垣間見える。香取神宮やその神職大禰宜家が伝える古文書の前で足が止まった。もともと神宮は有力者の寄進などにより広大な神領を抱えていたが、中世、この神領を横領しようとする国人領主と呼ばれる階級が出てくる。そうすると外部から来てその地を治める守護と、在地の国人領主が対立する構図が生まれる。鎌倉幕府が介入して争いを調停しようとするが、うまくいかない。幕府を支えていた御家人の惣領制が崩れて、家臣層が在地支配を強化していく様子が、香取神宮領をめぐるいざこざから見えてくる。14世紀後半の資料は、神宮領13郷のうち9郷が守護方に奪われたことを教えている。

また、利根川や霞ヶ浦沿岸の漁民が香取神宮に対して負担してきた海夫役という課役も、納入されなくなってくる。これも香取神宮への納入責任者が、義務を果たさない国人領主へ移行していったことに対応するようだ（段木一行「香取神宮と国人領主」房総の郷土史第9号）。

宗教的な権威は世俗の権威を保証するものとして機能しているうちはいいが、都合が悪くなると世俗の権威が刃向ってることが珍しくない。織田信長は延暦寺の寺領を横領しただけでなく、寺を焼き払ってもある。

中世ヨーロッパに目を向けると、聖職叙任権をめぐるローマ教皇グレゴリウス7世と神聖ローマ皇帝ハインリッヒ4世の対立が思い出される。このときはハインリッヒ4世がグレゴリウス7世にひざまずいて破門を解くようお願い出るカノッサの屈辱によって、宗教的な権威が世俗への優越を示した。

今日まで信仰が続く香取神宮は、それだけ信仰の需要を引き受けているのだが、裏には意外な歴史が隠されていた。

（まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士）